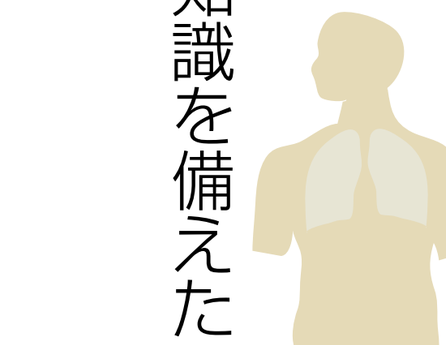
大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 分子制御内科学分野

医科学教育部 博士課程［M.D.-Ph.D.コース］3年

荻野 広和 おぎの ひろかず

内科疾患を広く診療できる技術と知識を備えた医師を育成



開講35年を迎える若き研究室

荻野さんが学ぶ分子制御内科学分野は、昭和46年（1971）に医学部内科学第三講座として開講。平成16年（2004）4月、蔵本地区の医学・歯学・薬学・栄養学を統合した大学院ヘルスバイオサイエンス研究部の設立により改称されました。

曽根三郎先生（第3代教授、平成14－18年医学部長）を中心に、現在、外国人研究者6名を含め30数名が所属しています。

曽根先生は国際的にも活躍され、主催者として多くの学会も開催。昨年も日本で初めて「国際がん転移学会」を開催し、海外からも多くの研究者が集いました。また来年度には、地方大学として初めて「日本呼吸器学会」を主催する予定となっています。

同研究室の研究内容は国際的にも高く評価され、また臨床面においても地域医療に貢献しうる優秀な医師を多く育てています。

研究室の雰囲気は和気藹々としており、飲み会やボーリング大会はもちろん、徳島名物『阿波踊り』の時には教室で連を組んで参加。留学生たちも年々踊りが上手になり、毎年楽しみにしています。大阪出身で、徳島に来て6年になる荻野さんも驚くほど、みんなうまくなるそうです。

曽根先生は年に一度は自宅でホームパーティーを開くなど、教室員との交流を大切にしています。ゴルフもうまく、ゴルフ部の顧問も務めています。

「曽根先生はとにかくアクティブでリーダーシップのある人です。新しいことも積極的に取り入れていくし、また学生との交流も意欲的です」

そう語る荻野さんもバレーボール部に所属していたこともあり、今でもOBとして時々練習に顔を出しています。

はてしなき研究に終わりなき挑戦

荻野さんは、医師である父親を尊敬して医学部へ。3年生の時に曽根先生と出会い、M.D.-Ph.D.コースを紹介され、このコースへ進みました。

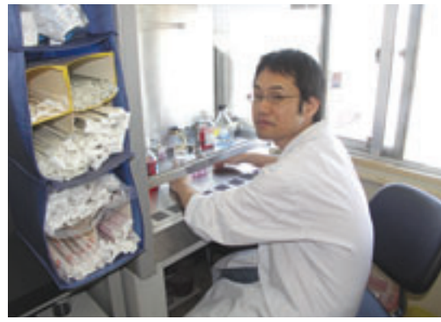
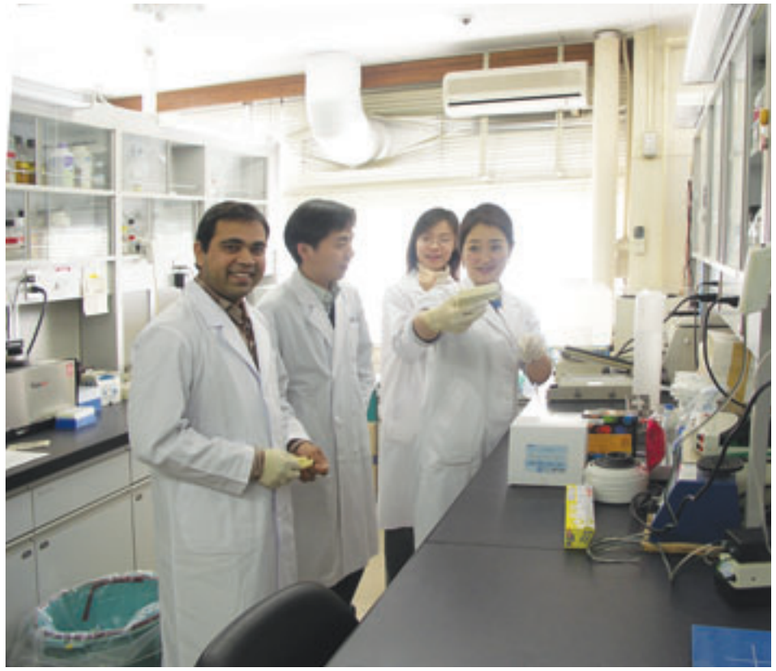
M.D.-Ph.D.コースとは、曽根先生などの尽力により平成15年度から徳島大学に導入されたもので、以下のような内容です。

『希望する医学部医学科学生は4年次終了時点でいったん医学部を中途退学し、大学院に入学（学部成績評価と面接試験をもとに判定）。大学院で教育・研究指導を受け、早ければ3年で修了し、学位（博士Ph.D.）が授与される。学士の資格と医師国家試験受験を希望する者は学部5年生に再入学する（試験は免除）。再入学後、臨床実習を中心に2年間勉強し、国家試験に合格すれば、医師（M.D.）の資格を得る。従って、最短でPh.Dの資格は医学部入学後7年、医師免許取得までは9年となる』（徳島大学「21世紀に向けた医学部の取り組み」より抜粋）

「研究のみに専念できるこのコースは、若い時から研究思考が身に付くし、成果が上がれば3年で学位が取得できるのでとても魅力的だと思いました」

研究室はガンの転移を研究するグループ、肺線維症やガンの免疫療法を研究するグループ、リウマチや膠原（こうげん）病の研究グループ、喘息やアレルギーの研究グループの4つに分かれており、荻野さんはガンの中でも特に肺ガンの転移ついての研究をしています。毎年5万人以上の人が肺ガンと診断され、ガンで亡くなる方の6人に1人は、肺ガンであるそうです。

各グループは週に一度ディスカッションし、またそれぞれの研究の成果や情報を交換するために、夏と冬に4グループ合同の発表会を行っています。

医学の進歩により、肺ガンに対する様々な新しい薬剤が開発されているものの、死亡率は年々高くなっています。その1番の要因としてあげられるのが転移による再発です。転移とは元々肺に出来たガン細胞が主に血液の流れに乗って他の臓器（脳、肝臓、副腎、骨など）に飛び、そこで増殖してくる事により起こります。その一連の流れの中では様々な分子が複雑に絡み合っており、転移の予防やそれに対する治療は容易なものではありません。

肺ガン転移の分子メカニズムの解析や新しい治療法の開発を行っている荻野さんの研究、それは終わりなき挑戦なのです。